包括訳聖書と神の隠喩

おやさと研究所嘱託研究員
金子　珠理　*Juri Kaneko*

聖書改訂の包括的アプローチ

日本でも1990年代にはジェンダー平等の流れにより、女性のイメージの強い「看護婦」や「保母」という言葉が、それぞれ「看護師」、「保育士」に言い替えられるようになった。こうした性差別用語をなくしていこうとする動きは、アメリカではすでに1970年代頃から盛んに試みられている。それは出版社や官公庁におけるガイドラインや代用語の作成にとどまらず、宗教の分野にも広がっていった。

たとえば、アメリカのキリスト教界では1980年代になると『聖書』の中の男性を示す語句を問題にし始めた。リベラルな立場をとるアメリカ・バプテスト教会系のウェスレー神学校は、1982年に「教会における礼拝時の差別的用語撤廃について」というパンフレットを発行している。それによれば、man、men、mankindは、people、men and women、humanity、personsなどとなり、brothersやbrotherhoodは、sisters and brothers in faithやthe family of faithなどとなる。

NCC（全米教会協議会）は、1980年にキリスト教における女性差別を解消する目的で、聖句集委員会を発足させ、1983年に『聖書』の前半の3分の1を検討し、性差別を排除した『総括的用語の朗読用語集』と題する聖句集の第1巻を出版している。そこでは基本的に、God the Father（父なる神）はGod our Father and Motherに、Son of God（神の御子）はChild of Godに、Son of Man（人間）はHuman Oneに置き換えられている。委員会は1984年に第2巻を、そして1986年に『両性を含めた聖書の異本』3巻本を出した。1990年になると「新改訂標準版」(New Revised Standard Version, NRSV）の『聖書』を出版したが、ここでは女性差別用語排除以外にも様々な配慮がなされている[(1)]。

そして、この「新改訂標準版」を出発点としつつもNCCとは独立したV.R.ゴールドらのプロジェクトによる、いわゆる“Inclusive Bible”（包括訳聖書）が1995年に出版された(*The New Testament and Psalms. An Inclusive Version*, Oxford University Press, 1995)。その基本方針について、日本語版「序文」にはこう述べられている[(2)]。

> わたしたちは、性別、人種、身体能力、その他の事柄に対して、明確な表現を心がけて聖書を英訳しながら、聖書の原典の特別版、つまり包括訳作りを目指しています。
>
> 本書では男女どちらの性に偏ったことばのうち、特定の歴史的人物を示さないものはどれも、説明的なことばや別の訳語などで、言いかえたり、言いたしたりしてきました。また、人種や肌の色や宗教に対する軽蔑的なことばも、身体的な障害だけで人を判断するようなことばもすべて、包括的な表現で同様に言いかえています。

このように「包括的アプローチ」は、性差別以外の差別にも配慮するものであるが、ここでは特にジェンダー関連の事例として「父なる神」という従来からある神の隠喩（メタファー）について考察してみよう。

「父なる神」をめぐって

包括訳聖書では、神の隠喩として「Father」ではなく「Father-Mother」が使用されている。天理教では神は「親神God the Parent」と表現されるが、この「Parent」が包括訳聖書における「Father-Mother」の発展形・進化形なのかどうかの議論はさておき、なぜ包括訳で「Father-Mother」となったのかを、序文で確認しておこう。そこには「隠喩」の本質に迫る見解が示されているからである。

> 神が父であるというとき、いわゆる良い父親には、愛と思いやりといった資質があることから、神と人間の父親とが似ていると言っているのです。しかし、世の父親全員がかならずしも愛と思いやりを示すわけではないし、もっと突きつめれば、神は人間の父親のようにかぎりある存在ではないのですから、神はすべての人間の父親に似ていないこともまた明らかです。というわけで、神は人間の父親に似ていないところがたくさんあります。隠喩の力は、類似性と相違性の双方から生まれるのです。しかし、どの聖書の隠喩も硬直化して、文字通り神は父だと言い切ってしまったら、なぜ神が父親に似ているのか、なぜ神が父親以上の存在なのか、と考えさせるコミュニケーションの力を失うことになります。…（中略）…本書で「父母（ちちはは）Father-Mother」という新しい隠喩を作った目的は、その隠喩がどのように読まれているかを読者に考えてもらい、どうしてそれと神とが同じなのか、また違うのか、と質問せしめる隠喩の力を体験してもらうためでもあるのです。

ちなみに「Father-Mother」の日本語下訳は、当初「父母（ふぼ）」となっていたが、結局は荒井献の提案になる「父母（ちちはは）」が採用されたという。荒井氏は、「父母（ちちはは）」を提案した第1の理由として、新井奥邃がすでに明治末期、大正初期においてキリスト教にかんする漢文調の文章の中で「父母神（ちちははかみ）」を用いていた点を挙げている。第2の理由としては、「父母（ふぼ）」よりも「父母（ちちはは）」の方が隠喩としての力が保持されると考えたからという[(3)]。

さて、「父なる神」は「神＝男性」を思わせる隠喩でもある。ヨハネ福音書だけでも100回以上、神の代わりにこの隠喩が使用されているが、それを繰り返し読むことで神が男性だと考えてしまい、中には違和感を感じる人もいるのである。

［註］

（1）以上、生駒孝彰『神々のフェミニズム』（荒地出版社、1994年）を参照。

（2）V.R.ゴールド他編『聖書から差別表現をなくす試行版 新約聖書・詩編（英語・日本語）』株式会社DHC、1999年。

（3）荒井献「Inclusive Bible（日本語訳）における父母のメタファーによせて」、『日本フェミニスト神学・宣教センター通信』No.4、2000年8月。